慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経験の沈殿と意味をめぐって
Sub Title	On a sedimentation of experiences and meanings
Author	草柳, 千早(Kusayanagi, Chihaya)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2022
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.27 (2022. 7) ,p.26- 31
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：青池先生と山岸先生を悼む～あの頃の三田社会学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

経験の沈殿と意味をめぐって
On a Sedimentation of Experiences and Meanings

草柳　千早

１．はじめに
他者との出会いと相互作用から私たちの生活は成っている。各々の生活が互いに絡み合い交差しながら世界は連綿と続いていく。その連続は、個々の生の限界を超え、人から人へさまざまなことを伝えていく。その中に身を置くことで、私たちは多くのことを他者から受けとる。

２．授業
三田の春、2 年生、「社会学特殊—文化と社会」と「都市社会学」、この 2 科目で山岸健先生に出会った。授業は毎回、始業のベルとともに始まり、手書きの図と文字が紙面一杯に書き込まれた B4 サイズのレジュメが配られ、終業のベルが鳴り終わるまで続いた。

授業中、山岸先生はさまざまな研究者とその言葉に言及した。印象に残っているのは、メルロー=ポンティ、フッサール、シュッツ、サルトル、バシュラール、ベルクソン、ルソー、プルースト、それに、ムジール、フチーク、イヨネスコ。先生が彼ら[1)]の言葉を引きながら熱意を込めて語ることにひかれた。他方、必修科目「原典購読」では教科書『Sociology』を読み、社会学の理論や概念、方法について学んでいたが、そこからはのぞめなかった眺めが、山岸先生の話す傍から広がっていった。果たしてその意味を私はどれほど理解できていたのかは疑わしい。しかし毎週の講義は続く。レジュメはたまりノートは分厚くなっていく。

秋頃には、第一希望は「山岸ゼミ」、となぜかすっかり思っていた。人気ゼミで、選考の面接がゼミ教室で先生と勢揃いしたゼミ生たちによって行われた。もし山岸ゼミに入っていなかったなら、私の人生は今とはまったく違うものになっていただろう。

３．日本における現象学的社会学の草分け— 国立国会図書館データベースから
日本における現象学的社会学の展開を、ある学会報告に向けて調べたことがある[2)]。「現象学的社会学」「シュッツ」という語が含まれる書籍・論文を国立国会図書館データベースで検索すると、1970 年代後半から文献が出始めていることがわかる。80 年代に入るとシュッツの著作の翻訳書も刊行され始め、論文や書籍が次々に現れる。この時期が日本の社会学における現象学的社会学の草創期と言えそうである。一群の文献の著者に、戦後生まれの当時若手の研究者たち[3)]が名を連ねている。日本で現象学的社会学が、新しい世代の研究によって担われ推し進められていたことが見てとれる。その若手らの名に混じり、山岸健、船津衛、山口節郎、佐藤嘉一、吉田民人、下田直春といった 1930 年代生まれの人々の名がある。当時すでに大学で研究指導に携わり、上記若手研究者たちが学んでいた人々である。

山岸先生は、1980 年『季刊労働法』別冊第 6 号「特集現代社会学」で「現象学的社会学」を担当している。1985 年には日本初の現象学的社会学論集、『現象学的社会学—- 意味へのまなざし』（1985）を刊行した。そして、言うまでもなく先生自身の著作がある。1983 年には「日本現象学・社会科学会」が設立された。山岸先生は発起人の一人である[4)]（同学会ウェブサイトより）。

草柳千早「経験の沈殿と意味をめぐって」『三田社会学』第 27 号（2022 年 7 月）26-31 頁

山岸先生は日本における現象学的社会学、草創期の展開にとって重要な、いわばキーパーソンとも位置づけられる研究者の一人であったことが、今誰でも簡単に参照できるデータから窺える。

『現象学的社会学』(1985)の「はじめに」にこうある。「行為する人間や経験する人間が日常生活の場面と状況と世界においてこれほどまでにクローズアップされてきたことがこれまでにあったとは思えない。私たちは社会学の新たな地平を展望できる地点に立っているのだ。他者たちや私たち自身を含めて私たちの身辺のすべてのものがいままでにないほど豊かな表情を示すようになったのである。」（山岸・江原 1985: iii）。

山岸先生の文章と思われる。続けてこう書かれている。「現象学的社会学は自明視されているものや自明性、日常的なものに徹底して疑いをかけていく社会学であり、まさに見るようになった社会学なのである」。先生自身による第１章「日常的世界と人間」の最後には、次のような文章がある。「思考するとは、見ることを、注意深くある態度を学び直すこと」。社会学は「〈眼〉そのものだが、この〈眼〉は徹頭徹尾、〈見る眼〉なのであり、〈見るようになった眼〉でもあれば、〈見ようとする眼〉でもあるのだ」。「〈見る眼〉そのものである社会学によって、私たちは日常生活の光景を直視することができるのである。」（同書: 26）。

〈見る眼〉には注がつけられ、メルロー=ポンティへの言及がある。「メルロー=ポンティによれば、見るとは対象のなかに身を沈めることであり、見るとは眼に見えるもの以上を見ることであって、見えないものとは見えるものの起伏なのである」（同書: 27）。

「社会学とは一つのまなざしなのである」（同書: 23）。主語は「社会学」だが、実際に見るのは私たち生身の人間である。そして見ることは、単に視覚的な体験ではなく、身体的な体験である。身体は私の「座標原点」であり、「私たちは、自分の身体によって世界に巻き込まれているのである」（山岸 1981: 18, 21）から。私の身体が移動すれば私のパースペクティブは変わる。山岸先生は、現象学的社会学の名の下に、見るという体験に特別なまなざしを注いでいたように思う。

４．山岸ゼミナール

ゼミが決まるや新年度を待たず、早速２つの行事へと呼びかけられた。まず卒論発表会。港区三田図書館の和室であった。繋げられた座卓に２年生から４年生まで３学年、総勢４０人を超えるゼミ生がめじろ押しに座った。自由に研究できるゼミ、と聞いていた。ボッチチェリの作品論、メルロー=ポンティにヒントを得たシーニュ論等。各報告に質疑応答と先生のコメントが加わった。今手元にある、ゼミを紹介する先生の文章にはこうある。

「私のゼミナールでは、研究テーマは、学生が自主的に決定することになっている。テーマは多方面にわたっているが、いずれも個性的なものだ。せっかくの研究であるから、自分の気持ちにそって思いどおりの研究をおこなってほしいと思う」[5)]。その通りであった。

続いて、春休み中の合宿を知らせる連絡が文献の指定とともに届いた。千葉県大網白里町にて、ジンメル『社会学の根本問題』。取り急ぎ本を手に入れて読むも、難解で理解できないまま当日を迎えた。宿屋の座敷で、またも座卓に座布団という格好で３年生の報告を聞いた。難しすぎてわからない。発言を求められとても焦った。

そして新年度、古典的な文献を毎週１作品、講読に追われるゼミが始まった。『社会学の根本概念』『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』・・・。ゼミ在籍中に『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』『宗教生活の原初形態』等、社会学の文献のほか、『社会契約論』『エミール』『ホモ・ルーデンス』『歴史主義の貧困』『写真論』等、いろいろ読んだ。こ

の進行速度で各文献を一体どこまで読みこなせていたかと言えば疑わしい。先生もそんなことは先刻承知の上だったのではないか。だが、この講読経験はその後の私にとって大切な財産になっているように思う。ろくに理解できなかったものがどうして財産になりうるのかと訝られるかもしれないが本当である。

のちに言葉を見つけた。「経験の沈殿（A sedimentation of experiences）」。「知識の習得」についてシュッツとルックマンはこう表現している（Schutz and Luckmann 1974:119）。何はともあれ、経験が沈殿した、という感じである。

ゼミの活動は文献講読にとどまらない。合宿は、春と夏、年２回は恒例で、１年目には冬にも出かけた。夏、１年目は妙高高原、２年目は白馬村。宿にてゼミを行いつつ、積極的に時間をとって外に出た。先生は常にスケッチブック、クレヨンや色鉛筆を携帯し、先々であたりを素早く次々にスケッチしていた。

秋には三田祭にて、研究の展示発表を３年生が中心になり行った。私たちの学年の研究テーマは学生間で話し合った結果、「日常と非日常」。壮大である。文献を読み、話し合い、展示物を制作した上に、論集までつくった。先生はことの一切を学生に任せていた。下の学年からは、八王子セミナーハウスでいくつかの大学のゼミが合宿しながら行う「社会学合同セミナー」が始まり、毎秋参加するようになった。先生自身、このセミナーの発起者の一人であった。

学年末に向かっては、新ゼミ生の選考があり、卒論発表会と卒業コンパが大学外に会場を借りて行なわれた。

こうして振り返ると山岸ゼミの 1 年は盛り沢山である。しかも私たち学生は、「山岸先生は自由にやらせてくれている」と思っていたような気がする。実際、先生から指揮や指図のようなことを受けた記憶がほとんどない。

私は学部生のときから、先生に勧められ大学院のゼミにも参加させていただいた。そこには社会学研究科の院生のみならず、哲学研究科、早稲田大学、東京大学、都立大学などから、何かとても個性的な人々が参加していた。東大の院生たちは、先生が東大で担当していた講義に出ていたとのことだった。先生を通して、多くの人と、先に挙げた国立国会図書館データベースに名の上がっている研究者たちも含め、出会ってきた。山岸先生その人はもちろん、先生を介して出会ってきた人々から、その後将来、現在に至るまで、計り知れない作用を受け、学び、師や畏友を得、社会学を続けていくことになろうとは、当時の私はまったく知らない。

５．社会的世界における経験と意味

シュッツは、社会的世界を、他者との関係から、社会的直接世界、同時代世界、先行世界、後代世界に分けた（Schutz 1976=1991, 1932=2012）。直接世界は、直接経験の範囲内に「君が私と時間的にも空間的にも共存して」おり、「他者の持続経過と自己の持続経過の真の同時性」に基礎づけられている（Schutz 1932=2012: 245）。同時代世界は、直接世界の彼方にあるが、「私はそれにもかかわらず私と他我との共存を知り、私の意識体験と他我の意識体験が同時に経過していることを知っている」（Schutz 1932=2012: 270）。先行世界は、私にとって、他者を直接経験することの最早かなわない到達不可能な世界、すでに過ぎ去った歴史的な世界である。

しかし、先行者の世界の到達不可能性は、もちろん不可知であることを意味しない。直接世界や同時代世界と先行者の世界とを分ける「境界線」は「流動的」であるとシュッツは述

べる（Schutz 1976=1991: 88)。先行者の世界と私は繋がっている。

では、私たちは先行世界についていかに知ることができるのか。二つの道をシュッツは挙げる。第一に、「共在者や同時代者たちが自分自身の過去の体験を語ったり、彼らの共在者や同時代者についての過去の体験をわれわれに語ったりするといった、彼らの伝達行為」（Schutz 1976=1991: 90)。例えば、山岸先生が故郷長岡で体験した空襲について語るのを私たちは聴いた。そして今、私は、かつての授業やゼミについて語り、それを最早直接は知り得ない人々に伝達しているとも言える。

第二に、「記録」「もっとも広い意味での記念碑」（Schutz 1976=1991: 90)。先行者の世界への比較的間口の広い接近経路と言えるのではないか。例えば、先行者の著作物は皆この範疇に入るだろう。先に紹介した国立国会図書館のデータベースなどもこれにあたる。

とはいえ、先行世界とのこの繋がりは決して確実でも盤石でもない。上に挙げた二つの道いずれもがそれぞれに限定的なものである。例えば、第一の直接的な伝達経路の限定性。まず、シュッツとルックマンが指摘するように、経験は複定立的に形成されるが、経験の意味は単定立的に把捉される(Schutz and Luckmann 1973, 119–20, 訳 255-256)、という事態 がある。

「私の持続のあらゆる瞬間においてその身体状態、その感覚、その知覚、その態度決定作用とそ の感情状態についての意識を私は持っている。すべてこれらの構成要素は、私が生きる、その時々 の〈今のこのように〉を構成する。したがってこれらの体験のうちの 1 つについて、それが〈意味がある〉という場合、私は当然ながら次のことを前提にしている。この体験と同時に存在し、それに先行し、それに後続する、素朴に体験した夥しい体験のうちから、まさにこの体験を「際立たせ」、これに目を「向ける」ことである」 (Schutz 1932=2012: 71-72)。

こうして事後的に、「その類型的でレリヴァントな意味のみが単定立的に把捉され」る (Schutz and Luckmann 1973, 119–20, 訳 255-256) 。逆にいえば、生き生きとした「「本質的に直接的」な体験」(Schutz 1932=2012: 86) の豊かさは、意味の次元を超えており、それゆえ事後にはすでに失われている。シュッツによれば、想起の限界は、意味付与の可能性の限界と合致しており、 取り戻せないもの、語りえないものは、思考され得ず、単に生きられるのみである (Schutz 1967, 53) 。意味の叙述は「必然的にトリヴィアル（necessarily trivial)」なものとなる(Schutz 1967, 52) 。

ここに幾重もの脱落がある。先生が自身の体験について語る際に失われるその体験の豊かさや機微。その伝達行為を「今ここ」の直接経験において受けとる共在者としての私が、それを受けとるとき、さらにそれを第三者に語るときに失われるもの。夥しい経験の沈殿の中から、その時々の「現在の私」にとってレリヴァントな意味のみが、そのまなざしによって「際立たせ」られ言語化される、その周囲、背後に、より以上のものが置き去りにされていく。

そして私たちは忘却する [6)]。覚えていることよりも多くのことを忘れており、忘れていく。覚えていないこともあれば、多分覚えているのだが今は思い出せないこともある。

第二の経路の限定性は言うに及ばず。例えば国立国会図書館のデータベースは、「社会的にレリヴァントな知識」の集積であり、「いつもすでに、主観的なレリヴァンス構造(類型化と伝達動機)から大幅に切り離され」ている（Schutz and Luckmann 1973, 293, 訳 564)。「意味がある」ことだけが選別され、集積され、参照される。

「草柳さん、気づいてましたか。ブルー・レッド・アンド・ブルーを混ぜるとなんと紫色

になりますよ」。前者は言うまでもなく慶応のスクールカラー、紫は大妻女子大学のカラーである。「見てください。面白い形でしょう」。いつもの重そうに膨れた鞄から、拳大の２〜３倍はありそうな石を先生は取りだした。大妻嵐山高校に校務で行ってきたところで、高校の近くの河原から拾ってきたのだという。こんな重いものを、あんな遠くから。誰の目にもとまらずに転がっていそうな石が、先生のまなざしによって「際立たせ」られ、特別なものになる。「娘の美穂です」。三田の新研究室入口の階段で、中学生だった彼女と先生。「ここは多摩のアクロポリスですよ」。先生がそう呼ぶまで、大妻女子大学多摩キャンパスは、郊外の小高い丘が削られた、殺風景な造成地だった。「太陽は日ごとに新しい」。空襲のあと一夜明けて戻ってみると、家のあった跡に、貯金箱が焼け残って落ちていました。

「この世に生きたすべての人の、言語化も記録もされない、本人すら忘れてしまっているような些細は記憶。そういうものが、その人の退場ととともに失われてしまうことが、私には苦しくて仕方がない」（岸本 2022: 88）。それらがぜんぶ宇宙のどこかに保存されていてほしい、と岸本は続ける。

私たちの身体の内に経験は沈澱している。言語化され得ないものも沈んでいる。それらは主観的に「覚えている」という次元を超えて私の身体の一部になっている、と言ってもよいのではないだろうか。ふとした拍子に、沈殿していたものがかき混ぜられ浮き上がってくることもある。例えば、同時代世界で先生と関わりのあった人々が先生について話すのを聴くとき [7)]。同時代の人々と先生について話すとき。学生や院生と話しているとき。先行世界は繰り返し手繰り寄せられ、当時の経験の意味について現在の私は考える。

初めて出会った三田の春以来、山岸先生からどんなことを学んできたか、それをいま言葉で述べようとするならば、それは「必然的にトリヴィアル」なものとなるが、「トリヴィアル」は、先生からある時期よく聞いていた言葉であった。「日常のトリヴィアルなものへのまなざし」。いかなる状況にあろうとも、そのまなざしは状況と経験の意味を瞬く間に組みかえる。「三田の山」「多摩のアクロポリス」を闊歩していた先生から伝えられた、これもひとつの「生きる技（art）」[8)]と呼びたい。

【註】

1) どうしようもなく「彼ら」— 皆ヨーロッパ出自の男性 —-である。先生はそのことをどう思っているのだろうか、そして私はなぜ「彼ら」に、と思うようになるのはもっと後のことである。

2)“The Development of Phenomenological Sociology in Japan,” Society for Phenomenology and the Human Sciences 2019 Annual Conference, Pittsburgh, U.S.A.

3) 那須壽、片桐雅隆、平英美、小川博、西原和久、江原由美子、浜日出夫、吉澤夏子、桜井洋、北澤裕、山田富秋、好井裕朗、山崎敬一等。

4) 同時期、現象学的社会学研究会がつくられ、山岸先生は主要なメンバーであった。

5) 慶應義塾大学文学部社会学ゼミナール委員会『年鑑 』1978, p.23. 山岸ゼミナール「先生の言葉」より。

6) 忘却が日常生活の条件であることについては武内（2022）。

7) 最近では 2022 年 3 月 19 日、好井裕明さんの退職記念シンポジウム「日常性を再考する」にて、好井さんと岡原正幸さんが先生について話すのを聴いたとき。

8) M. de セルトーと E. ゴフマンの「日常的実践」の「技」を念頭に置く。

【文献】

岸本佐知子, 2022,『死ぬまでに行きたい海』スイッチ・パブリッシング.

Certeau, Michel de, 1990, *L'invention du quatidien 1 Arts de faire*, Gallimard Education.（山田登世子訳, 1987,『日常的実践のポイエティーク』国文社.）

Goffman, E., 1961, Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates, Anchor Books.（石黒毅訳, 1985,『アサイラム --- 施設被収容者の日常世界』誠信書房.）

Schutz, Alfred, 1932, *Der Sinnhafte Aufbau der Sozialen Welt: Eine Einleitung in der verstehend Soziologie*,（佐藤嘉一訳, 2012,『社会的世界の意味構成　理解社会学入門』木鐸社.)

Schutz, Alfred, 1967, *The Phenomenology of the Social World*, Translated by George Walsh and Frederick Lehnert. Evanston, IL: Northwestern University Press.

———, 1976, *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, Edited by Arvid Brodersen. The Hague: Martinus Nijhoff.（渡部光・那須壽・西原和久訳, 1991,『アルフレッド・シュッツ著作集第３巻 社会理論の研究』マルジュ社.)

Schutz, Alfred and Thomas Luckmann, 1973, *The Structures of the Life-World*. Translated by Richard M. Zaner and Tristam H. Engelhardt Jr. London（那須壽監訳, 2015,『生活世界の構造』筑摩書房.)

武内保, 2022,「mémoire の無意志性と中動性 --- アルヴァックス記憶理論における技術と記憶の関係についての試論」『社会学年誌』63, pp.83-98.

山岸健, 1981,「現実構成と身体」『社会学評論』32 巻 3 号 pp. 18-35, 日本社会学会.

山岸健・江原由美子（編）, 1985,『現象学的社会学 意味へのまなざし』,三和書房.

（くさやなぎ　ちはや　早稲田大学）